

令和2年度 府立鳥羽高等学校 学校経営計画（スクールネットワーク）（実施段階）

全日制課程
令和3年3月31日

学校経営方針(中期経営目標)	昨年度の成果と課題	本年度学校経営の重点(短期経営目標)
<p>教育方針「人間性」「先駆者精神」「克己」の理念をあらゆる教育活動に活かし、知徳・体のバランスに配慮した生徒一人一人の学力の向上と個性の伸長を図り、地域社会から期待される人材の育成を図る。スーパーグローバルハイスクールの指定を機に策定した、グローバルリーダーを育成するための5つの力「価値創造力・協働力・突破力・寛容力・教養力」を育む。</p> <p>平成22年度策定「Mission Statement」の実現 ◆ミッション 「自律する人間」の育成 ◆ビジョン ○育てる生徒像…克己心・挑戦・自己理解・目標の設定と達成・夢の設計と実現 ○実行する教育…考える力育成・克己への支援・心身の鍛錬・社会性育成 ◆長期目標 ○在校生…課題を発見し、考え、まとめ、発信できる。 ○卒業生…母校に誇りを持ち、社会に貢献する。 ○中学生…夢が叶う高校として憧れる。 ○教職員…夢を共有し、ビジョンの実現を目指し、協働する。</p>	<p>○学力向上:スマートスクール事業により、ICTを活用した授業改善については大きく前進した。探究活動の指導法が確立し、スムーズに探究を進められるようになり、探究の質も高まりつつある。「指示待ち生徒」が多い現状をふまえ、自ら考え、動くことのできる主体的な生徒を育成するために、教員中心主義から生徒(学習者)中心主義に転換していく必要がある。</p> <p>○礼儀:全学年とも挨拶、服装、言葉遣いが正しくできた。引き続きマナーや時間を守ることを重点的に指導する必要がある。 ○SGH:5年間の指定を終え、これまでの研究成果をふまえ、ポストSGHを構築することができた。 ○人権意識等:啓発活動を通じて落ち着いた学習環境を保った。スマートフォン、携帯電話等の使用マナーについては継続して指導にあたる必要がある。 ○部活動:体育系・文化系ともに熱心に取り組み、全国大会へ出場する部も多く、世界的に活躍する部もあった。学習と部活動の両立を目指しつつ、短時間で効果的な活動を模索しなければならない。 ○広報活動:生徒が主体的に運営する学校説明会や、HPのタイムリーな更新を実施し、特色ある教育活動をより広く広報することができた。より見やすいページにするためのリニューアルも考える必要がある。 ○ポストSGH:この10年間の成果を継承しつつ、5年後、10年後の学校の在り方を検討し、目指すべき中期目標、長期目標を明確化しなければならない。</p>	<p>平成22年度策定の「Mission Statement」と新たなミッション「グローバルリーダー育成」の目標達成のために、組織体制をさらに充実させ、以下の点を重点として実践する。また、この10年間の成果を継承しつつ、5年後、10年後の学校の在り方を検討し、目指すべき中期目標、長期目標を明確化する。</p> <p>(1) 規律ある中で互いに助け合い切磋琢磨する質の高い学習集団を作り、組織的・計画的な進路指導により生徒の進路実現を図る。また、新学習指導要領についての研究を進め、探究活動を活かした大学入試などの高大接続に組織的な対応を図る。 (2) 5年間のスーパーグローバルハイスクール研究開発の成果を広く校外に普及させ、単位制を導入したカリキュラム、ポストSGHの教育実践を展開する。 (3) ICTを活用したアクティブ・ラーニング等による統合的・発展的なりべらるアーツ教育を推進し、基礎的な学力を充実させるとともに、思考力、判断力、表現力を高め、主体性を涵養する。 (4) 各分掌・教科が連携しながら、計画的かつ組織的に、単位制を導入したカリキュラム、ポストSGHの教育実践を展開する。 (5) 引き続き外部との連携を活用し、ポストSGHの教育実践を展開する。 (6) 第1期生を送り出したグローバル科の専門科目や教育活動をさらに充実させ、単位制の特長を活かし、希望進路を実現させる。 (7) あらゆる教育活動において人権感覚を涵養するとともに、人や社会とつながり、共生するための力をつけ、地域社会の一員としての自覚を高める。 (8) 部活動を通して、各部の目標達成をめざすとともに、自律する人間の育成と個性伸長を図る。 (9) 本校の教育実践や生徒の活動を積極的に広報することにより、本校の教育活動への理解を深める。 (10) Society5.0を見据え、ICTの利活用の研究をいっそう進める。</p>

評価領域	重点目標	具体的方策	総括	成果と課題
学習指導	単位制の特長を活かしたりべらるアーツ教育を推進し、生徒の学力・教養力向上を図る。	あらゆる教育活動を通じて思考力・判断力・表現力を養い、生徒一人一人が主体的に課題を設定し自学自習に取り組むよう指導する。	A	<ul style="list-style-type: none"> ・Withコロナの状況を踏まえて、ICT機器を活用した授業(取組)は昨年度以上に大きく前進した。来年度の入学生より一人一台端末となる中で、単なる資料提示だけでなく双方向の情報発信や主体的な学習形態が求められる。教職員間の情報共有及びスキルアップに向けて研修会等を定期的実施する必要がある。 ・感染拡大防止のため今まで培ってきた学習形態(ペア・グループワーク、ディスカッション等)を実施できない中で各教科の特性を活かしながら授業を行った。このコロナ禍での学習形態について検討し、体系化する必要がある。 ・専門学科及び各コース・専攻の特色及び位置づけを今一度検討し、5年後、10年後を見通した戦略的ビジョンを持つ必要がある。
		「鳥羽の学びネットワーク」を活用した効果的な教科指導(アクティブ・ラーニング等)により、学びの質や深まりを強化する。	A	
		学科やコースの特色に応じた教育計画を策定、実施し、学習状況調査、授業評価、学力状況等により検証を行う。	A	
生徒指導	ルールとマナーを守る態度を育成する。	基本的生活習慣の確立、安全指導及び問題事象の未然防止について、その目的・基本姿勢を確認し、教職員が一致した基準・方法で指導する。	A	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒指導件数は全体としては減少しているが、定期考査や小テストでの不正行為が数件あり、指導の緩みがないよう共通認識のもと、指導体制を常に維持していくことが大切である。 ・教職員の一一致した指導を推進するために、教員の目線合わせをしっかりとしていきたい。 ・感染拡大防止の観点から発声したあいさつを徹底することができなかったが、仕草としてしっかりとあいさつできるようになっている。マナーの面でも、誰もが気持ちよい行動をとれるようにしていきたい。 ・部活動においては、多くの大会、コンクール、発表会が中止・縮小開催となり生徒のモチベーションを維持することが困難であった。校内での感染拡大が生じないよう教職員及び生徒ともに感染防止に向けた啓発と対策を徹底する。 ・ボランティア活動については、ほとんど実施(参加)することができなかった。コロナ禍での在り方を検討する必要がある。 ・いじめについては、いじめアンケートだけでなく担任、教科担当、部顧問と保護者の協力によって早期発見、早期の対策がとれているが、今後継続した指導と一層の連携が必要である。 ・いじめ事案の未然防止という観点をもっと強めていきたい。
		あいさつを交わす、正しい言葉を遣う、身だしなみを整えることは、マナーの基本であることを理解させ、実践できるよう指導する。	A	
	これからの社会づくりに積極的に貢献する態度を育成する。	生徒会、各種委員会、クラス活動、ボランティア活動などを通じて、協働する力を養う。	A	
		部活動を通して、技能を修得するだけでなく、思考力・判断力・表現力を育成し、主体性・意欲の向上につながるよう指導する。チーム内で切磋琢磨し、より高い目標を設定し、突破する力を養う。	A	
		ルールとマナーを守り、互いに尊重しあう人間関係を築き、違いを認めあう寛容な心を育てる。	A	
組織的にいじめの未然防止を図る。	いじめについての理解を深め、「いじめ防止対策推進法」「京都府いじめ防止基本方針」「鳥羽高等学校いじめ防止基本方針」に則り、いじめ対策委員会を中心に組織的にいじめの未然防止、早期発見を図る。	B		
人権教育	あらゆる教育活動を通して人権教育を推進する。	人権問題を自分自身の課題としてとらえ、インターネットの普及に伴い多様化・複雑化する人権問題の解決に向けた人権教育の推進と教職員研修を充実させる。	A	<ul style="list-style-type: none"> ・教職員対象の人権研修を含め、日常の教育活動を行う上で更に人権意識を高める取組の継続が必要である。 ・インターネット、SNSの正しい利用についての研修や指導は継続していく必要がある。
進路指導	生徒一人一人の進路希望を実現する。	分掌、教科との連携のもと、組織的な指導体制により、個に応じたきめ細かい進路指導を行う。	A	<ul style="list-style-type: none"> ・特に3年生の2月進学補習については、Teamsを活用し登校ができない場合でも個別指導が行える環境を整えることができた。 ・担任と分掌や教科の連携をより強化し、生徒の夢の実現をさらに推し進めることができた。
	職業観・勤労観を育成する。	望ましい職業観・勤労観を身につけさせ、主体的に進路を選択する能力・態度を身につけさせるため、計画的・継続的に進路指導・キャリア教育を行う。	A	
情報教育	望ましい情報社会の創造に参画しようとする態度を育てる。	SNSやインターネットの効果的な活用方法についての意識を高め、スマートフォン、タブレット等の使用についてのマナーを身につけさせる。	A	<ul style="list-style-type: none"> ・ICT機器(タブレットやプロジェクター等)の使用率は飛躍的に向上した。主体的学習や思考力・表現力が身につけてきているのかを検証する必要がある。 ・令和元年度からスマートフォンの校内持ち込みを解禁したが、使用マナーについては継続して指導にあたる必要がある。
グローバル人材育成	WWL事業拠点校・グローバルネットワーク京都校として、グローバルリーダーの素養を涵養する。	平常の授業に加え、海外学校の来校等の機会を活用した国際交流や、論文コンテスト、英語プレゼンテーション大会等を通じて、国際的視野を持って思考・判断・表現する力を育成する。	A	<ul style="list-style-type: none"> ・例年実施していた海外研修やアジア架け橋プロジェクト・海外の高校生生徒との交流はできなかった。後半からオンライン等により国内外の高校、大学や企業と交流の機会を持つことができた。教員も含め生徒たちも遠隔による国際交流にずいぶん慣れてきた。
保健・特別支援	健康の保持増進と支援の必要な生徒の課題解決に必要な学校環境作りを進める。	検診等の結果を踏まえ、生徒の心身の健康の保持増進に努め、学校における保健管理、安全管理を適切に進めるとともに、支援の必要な生徒の教育的ニーズに応じて学習上、生活上の困難を改善する。	A	<ul style="list-style-type: none"> ・支援や配慮の必要な生徒に対して計画的に会議を開き情報共有が図れた。今後ますます多様化する生徒たちの教育的ニーズへの対応を確実に実践に結びつけていくことが必要である。
読書指導	読書活動を推進する。	図書館利用を促進して読書活動を活性化し、豊かな教養と広い視野を育てる。	A	<ul style="list-style-type: none"> ・静かな読書環境を整えることができた。来年度に向けて設備面(PC等)の充実を図る。
家庭・地域社会との連携	家庭・地域・社会との連携と交流を積極的に行う。	HPをはじめ、説明会や出版物等を通じ、本校の教育活動に関して幅広く積極的な情報発信を行い、本校への理解を深める。	A	<ul style="list-style-type: none"> ・実施できた取組や行事、大会等についてはタイムリーに情報発信し、HPへの掲載ができた。しかし、コロナ禍により多くの行事が中止や変更になり、例年よりも発信量は減少した。来年度に向けては、一層の情報発信に努める。
施設設備・文書・情報管理	学習環境の質を確保する。	生徒の安全を確保するとともに、よりよい教育環境づくりに向けて施設・設備の充実を図る。	B	<ul style="list-style-type: none"> ・面談や生徒の質問に答える場所が不十分である。来年度は空き教室を自習室として確保し活用していく。 ・生徒用ロッカーの設置については、今年度末から令和4年度にかけて整備していく。 ・HR教室へのICT機器の設置など、設備面は充実してきた。来年度、1年生から生徒一人一台の端末の配備が不可欠である。 ・職員会議資料など様々な資料をデジタル化することが定着し、紙資源と時間外勤務の削減を進めることができた。 ・個人情報の管理については職員一人ひとりの意識を更に高めていく必要がある。
	個人情報に配慮した文書管理・情報管理を行う。	紙文書、デジタルデータともに、個人情報に配慮した適切な文書管理・情報管理を行う。	A	

評価の基準 A:十分達成できている。(目標以上の成果が得られている。) B:ほぼ達成できている。(ほぼ目標通りの成果が得られている。) C:達成できているとは言えない。(成果はあったが、目標は達成できていない) D:ほとんど達成できていない。(ほとんど成果が得られていない。)

学校関係者評価委員会による評価 評価10領域のすべてがA評価であった。これは経営目標の達成に向けてPDCAサイクルが機能していると思う。大変心強い。新型コロナウイルス感染症が、猛威を振るう中でも生徒の学習保障ができたことに敬意を払うと共に、以前からICTの利活用に積極的に取り組んでこられた成果が功を奏したと思います。ICTのさらなる充実と活用できる教員の拡大を目指してほしい。更に、このように新しいことへの挑戦(先駆者精神)が教育環境をよくしていくことから、教員が挑戦しやすい学校風土の定着を目指してほしい。SGH5年間の総括は、別途報告があってもいいのではないのでしょうか。

次年度に向けた改善の方向性 新型コロナウイルス感染症は、社会・世界全体を予測不能な状態に陥れ、教育現場にも大きな影響を与えた。この激変する環境の中で学びをどう行うかを考え出さなければならない。これからは今まで以上に、問題に取り組む姿勢や自分自身で考え判断し膨大な情報の中から必要かつ正しい情報を収集する能力が求められる。そのためには生徒は強いリーダーに引張られるのではなく、より主体的な個人(自律的な人間)になるために「総合的な探究の時間」のデザインは重要となる。鳥羽高校としての理念を持ちながら設計し、エビデンスベースで取り組んでいただきたい。また、教員が生徒個々に丁寧に寄り添ったり、外部組織と交流したり、自己研鑽したりできる時間とリフレッシュできる時間を充分に確保してもらいたい。学校経営計画の作成方法として、各学科・コースの個性を確認するために、学科・コース毎に作成するのがよいのではないかと。